

新約聖書の中の奥義 (まとめ)

奥義 (ギリシア語は、ムステリオン) の意味。

新約聖書の中では、ムステリオンという用語は、特定の意味をもつ神学的用語として使われていて、その意味はシンプル。「旧約聖書では全く啓示されていなかったが、新約聖書において明らかにされたこと」、という意味である。

聖書箇所は、マタイ 13 章 35 節、ロマ 16 章 25～26 節、I コリ 2 章 7 節、エペソ 3 章 4～5 節、9 節、コロサイ 1 章 26 節。

奥義の啓示。

奥義は、「使徒たちと (新約時代の) 預言者たちに」与えられた (エペソ 3 章 5 節)。

それゆえ、彼らは新約時代の教会の土台となり (エペソ 2 章 19～22 節)、新約聖書を書き記すことになった (エペソ 3 章 3、4、9 節)。

特に使徒パウロは、「神の奥義の管理者」 (I コリ 4 章 1 節) という特別な役割を神から受けた。

奥義のかず。

神の 8 つの奥義、サタンの 2 つの奥義、合わせて 10

神の奥義の第一と残りの 9 つの奥義との関係。

神の奥義の第一は、「奥義としての神の国」である。

メシアはイスラエルの王としておいでになられた。「悔い改めよ、神の国は近づいた」と人々に、のべ伝えて、イスラエルの人々に「メシアの王国としての神の国」を提供しようとした。しかし、イスラエルの指導者たちはメシアを拒否した。その結果、メシアはいったん、天に帰り、時期を待つことになった。そして、イスラエルが民族的に悔い改めて、メシアを求めると、メシアは地上に再びおいでになる。これがメシアの初臨と再臨である。ここまでは、旧約聖書の預言でも知られていたことであるが、新約聖書で初めて明らかにされたことは、メシアの初臨と再臨の間に、「奥義としての神の国」の時代が入る、ということである。マタイ 13 章、マルコ 4 章、ルカ 8 章に記される 9 つのたとえ話は、この国の特徴を教えるものである。

残りの 9 つの奥義はすべて、「奥義としての神の国」の時代に現れることと関係している。

奥義としての神の国の特徴を教える 9 つのたとえ話。

第一番目、種まきのたとえ話。「奥義としての神の国」の時代を通じて、福音の種まきが行われる。このとき、まかれた種をついばんで奪っていく鳥は、悪魔とその配下の悪霊たちである。悪魔は福音の種まきを妨害する。

第二番目、まかれた種は自ら育つことのたとえ話。蒔かれた福音の種は、内側にエネルギーを持っていて、自ら芽を出し、育つ。

第三番目、毒麦のたとえ話。真の種まきが行われるところで、それに対抗して、偽の種まきが行われる。その背後にいるのは、悪魔である。悪魔は福音の種まきを妨害するだけでなく、偽の宣教活動を行う。次の四番目と五番目のたとえ話は、この偽の種まきの結果である。

第四番目、からしだねのたとえ話。外面的には大成功して見事な成長をしていくかのように見えたが、そこには、鳥が来て巣を作る。すなわち、悪魔とその配下の悪霊たちによる偽の宣教活動の方が優勢になる。

第五番目、パンだねのたとえ話。パンだねは、つみ、とくに教理的な誤った教えを象徴する。奥義としての神の国は、大きく膨らむが、その内面には罪の腐敗、教理的な過ちが含まれている。

第六番目、隠された宝のたとえ話。悪魔の妨害にもかかわらず、神の計画は着実に進んでいく。このたとえ話の中の「たから」は、神の民、イスラエルを象徴する。一番目と二番目のたとえ話にあったように、この時代に福音の種まきがされると、神は、イスラエル民族の中から、レムナントを得る。レムナントとは、イスラエルの残れる者たちという意味で、少数の残りの者が信仰者となることを意味する。教会の中のユダヤ人信者が、この時代におけるレムナントである。

第七番目、高価な真珠のたとえ話。海は異邦人世界を象徴する。神はまた、異邦人の中からも信者を得る。それが高価な真珠である。六番目では、宝はユダヤ人信者であった。七番目のたとえ話の真珠は、異邦人信者である。ユダヤ人信者と異邦人信者、この両者が一つとなるのが、教会である。このことは、使徒パウロが、教会に関する 5 つの奥義の中で、詳しく教えるところとなる。

第八番目、地引網のたとえ話。海は異邦人世界を象徴する。地引網は、大患難期が終わり、メシアの王国に入る前に起きる事の一つ、諸国民の裁きを象徴する。この裁きについては、旧約聖書でも預言されていたが、マタイ 25 章 31～46 節では、イエス自ら、それをご自身の再臨の直後に行う、と明らかにされた。この裁きをもって、奥義としての神の国が終わる。大患難期を生き延びた異邦人たちは、義人たちとそうでない人々、すなわち信者と不信者とに分けられ、義人たちは、メシアの王国に入ることができる。

第九番目、家の主人のたとえ話。新しい物とは「奥義としての神の国」、古い物とは、神の国の他の 4 つの層。それらは似ているところもあれば、そうでないところもある。キリストの弟子たちは、それを理解すれば、聖書を正しく用いることができる。

旧約聖書の中ですでに知られていた「神の国」の 4 つの層とは、①、普遍的で永遠の神の国、②、霊的な神の国、③、神政政治によるイスラエルの国、そして④、メシアの王国であった。「奥義としての神の国」は、第五の層として新約聖書において初めて明らかにされた。

奥義としての神の国の時代には、教会時代と大患難期が含まれる。

奥義としての神の国は、【イスラエルによるメシア拒否】で始まり、【イスラエルによるメシア受容・メシアの再臨・諸国民のさばき】で終わる。

したがって、イエスがまだ十字架にかかる前、イスラエルの指導者たちがイエスをメシアではないと拒否したときから、奥義としての神の国は始まった。

この時代の中に、教会時代と大患難期が含まれる。

教会時代の始まりと終わり。

教会時代は、紀元 30 年、メシアの十字架と復活・昇天の後、聖霊降臨で始まる。今、私たちはこの教会時代の中にいる。やがて、教会に属するべき異邦人信者の数が満ちると、教会が完成し、教会の信者たちは、天に引き上げられる。これが教会の携挙である。携挙をもって、教会時代は終わる。

九つのたとえ話のうち、第一番目から第七番目までは、教会時代の特徴でもある。

大患難期の始まりと終わり。

教会の携挙の後、地上は 7 年間の大患難期となる。

大患難期について、旧約と新約聖書の中で預言されていることをまとめると、次のようになる。

大患難期は、七年条約で始まり、ハルマゲドンの戦いとイエスの再臨で終わる。

始まりは七年条約。国家としてのイスラエルと、ある小国の君主との間で、7 年間の有効期間を持つ、なんらかの条約が締結される。これが大患難期の始まりである。

その君主は、3 年半経過した時点でその条約を破棄して、イスラエルに敵対するようになる。その君主は、エルサレムの神殿で自らを神と宣言し、バビロンに首都を置いて世界を支配する。その人物が、「反キリスト」である。

反キリストによる世界支配は、それから 3 年半続く。その末期は、ハルマゲドンの戦いと呼ばれる戦争である。

ハルマゲドン、という場所に集結した反キリスト軍は、まずエルサレムを陥落させ、次にボツラに向かう。ボツラには、3 年半前に反キリストがエルサレム神殿に立つのを見て、避難してきたイスラエル人たちがいる。

反キリスト軍がボツラに近づき、いよいよ民族存亡の危機に瀕する中、ついにイスラエルの人々は、民族的に悔い改めてイエスをメシアであると認め、天に向かってメシアの帰還を祈り求める。

その祈りを受けて、イエスが天からボツラに降り立ち、反キリスト軍をエルサレム近郊まで押し返して打ち破る。これが、イエスの再臨である。

イエスが再臨しハルマゲドンの戦いが終結して、大患難期は終了する。

奥義としての神の国の終わり。

大患難期が終了してからメシアの王国が建国されるまでに、75 日間の準備期間がある。その間に、いくつかの出来事があるが、その一つが、諸国民の裁きである。大患難期を生き延びた諸国民が、キリストの前に集められ、信者と不信者とに分けられて、信者はメシアの王国への入国が認められる。九つのたとえ話の八番目、地引網のたとえ話は、この裁きを指す。これをもって、奥義としての神の国は終わり、メシアの王国としての神の国の時代に移っていく。

残りの9つの奥義。

教会に関する奥義が5つ、イスラエルの民族的救いの時期に関する奥義が一つ、サタンの二つの奥義と、それを打ち破る神の八番目の奥義、合計9つである。

「奥義としての神の国」との関係で見ると、この時代に含まれる2つの主要な時代である、教会時代と大患難期に、関係していることがわかる。

教会時代に関係するのは、まさに、教会に関する5つの奥義である。

大患難期に関係する奥義は4つ、①、イスラエルの民族的救いの時期に関する奥義、②と③は、サタンの二つの奥義、すなわち、②、バビロンの奥義と、③、反キリストについての奥義、そして、④、サタンの二つの奥義を打ち破る神の八番目の奥義、以上の4つである。

教会に関する5つの奥義。

第一に、七つの星と七つのきんの燭台（黙示録1章20節）。七つのきんの燭台は、地上の地域教会を象徴し、星はそれぞれの教会を守る守護天使を象徴する。

第二に、キリストのからだとしての教会（エペソ3章5～6節）。教会はキリストのからだであり、ユダヤ人信者と異邦人信者とから成る（エペソ2章11～19節）。異邦人が救いを受けることは旧約聖書でも知られていたが、ユダヤ人信者とともに一つのからだ、教会に結び合わされることは、新約聖書で初めて明らかにされた。

第三に、教会の信者の中にメシアが住んでくださること（コロサイ1章27節）。聖霊が信者の中に入ってくださいすることは旧約聖書でも知られていたが、メシアが信者の中に内住することは、新約聖書で初めて明らかにされた。

第四に、メシアの花嫁としての教会（エペソ5章22～33節、Ⅱコリント11章2節、黙示録19章6～8節）。旧約聖書ではイスラエル民族はヤハウェの妻と表現されていた。新約聖書では、教会はメシアの花嫁であると明らかにされた。

第五に、携挙のときに信者のからだは「変えられる」こと（I コリント 15 章 50～58 節）。からだが変わることについては、旧約聖書でも義人の復活が預言され、またエノクとエリヤの実例を通して、死を経ずにからだが変わることもあることが示されていたが、教会の信者が全員、死んでいた者も生きている者も、同時に、一瞬にして、からだが変わられ、栄光のからだ、不死のからだを受けることは、新約聖書で初めて明らかにされた。

大患難期に関係する 4 つの奥義。

第一に、イスラエルの民族的救いは教会が完成して携挙された後であること（ロマ 11 章 25～32 節）。教会の完成は、教会に属すべき異邦人信者の数が満ちるときである。

第二と第三は、2 つのサタンの奥義、すなわち、バビロンの奥義（黙示録 17 章 1～18 節）、と、不法と不法の人の奥義（II テサロニケ 2 章 1～12 節）。

バビロンの奥義とは、大患難期において前半期、バビロンは世界統一宗教の本部が置かれ、イエスを救い主と信じる信者たちを迫害する。そして、後半期、反キリストの世界支配の首都となる。

不法と不法の人の奥義。不法の人である反キリストが、合法的にではなく、不法にその権力の座に着く。反キリストが不法に登場することを引き止めているものとは、神によって人間社会に与えられた統治者の権威、法の支配による統治体制である。それが取り除かれると、反キリストによる世界支配の時期に入る。

第四は、「神の奥義」（黙示録 10 章 7 節）。2 つのサタンの奥義を打ち破る神の 8 番目の奥義である。大患難期後半期における反キリストの首都であるバビロン、そしてそのバビロンの王座の上に座る反キリスト、その両者を打ち砕く。

黙示録 11 章 14 節では「第三のわざわい」、15 章 1 節では「最後の七つの災害」とも呼ばれ、具体的には、黙示録 16 章 1 節から 21 節までの、七つの鉢の裁きを指す。

奥義と私たち信者との関係。

福音の奥義（エペソ 6 章 19～20 節）。福音をのべ伝えることは、奥義そのものを知らせ教えることである。奥義はベテランの信者だけにではなく、すべての信者に教え広められるべきものである。

信仰の奥義（I テモテ 3 章 9 節）。奥義は、信仰の内容である。今の時代において私たち教会の信者が信じるべき信仰の内容は、福音の三要素と奥義である。福音の三要素を信じて救いを受け取り、奥義を信じて、霊的に成長する。

敬虔の奥義（I テモテ 3 章 16 節）。真の敬虔は、奥義によって生み出される。敬虔の奥義とは、メシアご自身である。

キリストは肉において現れ、
霊において義とされ、
御使いたちに見られ、
諸国の民の間で、のべ伝えられ、
世界中で信じられ、
栄光のうちに上げられた。（第一テモテ 3 章 16 節）

この資料は、聖書フォーラム福岡集会、2022 年 3 月 19 日の資料です。

出典は、フルクテンバウム博士の次の論稿によります。

”The Eight Mysteries of The New Testament”